視察研修報告書

報告者　合田良雄

報告年月日	平成27年3月30日
視察研修者	海盛会（合田良雄、赤崎光男、菅原規夫、川崎勇一、海老原正人）
視察期間	平成27年3月23日（月）～平成27年3月24日（火）
視察先	秋田県藤里町（人口3800人）
用務の相手方	藤里町社会福祉協議会上席事務局長　菊池まゆみ氏
用務	生活困難者の力を地域づくりに生かすシステムづくり

結果・経過・所感

白神山地の麓・秋田県藤里町を視察訪問した。当地・藤里町社会福祉協議会が行っている「こみっと」実践は、まさに今求められているコミュニティソーシャルワークの実践そのものである。秋田県社会福祉協議会が平成17年度から推進した「地域福祉トータルケア推進事業」のモデル地区にも選定され、その活動はまさに新たな地域福祉の創造と挑戦と言える。

「市町村社会福祉協議会の職務は、地域の福祉ニーズを把握し、地域に必要な福祉事業の開発・政策提言をすると同時に、実際に事業を企画・運営していくこと」と20年前に教えられた社協の事務局長がリーダーととなり、コミュニティソーシャルワーク機能である①地域住民の生活課題を住民目線と専門職目線の両方の立場から把握すること②それら明らかになった生活課題を解決できる既存の福祉サービス・福祉制度があるかどうかを確認し、生活問題を抱えている人々に繋げること③もし、既存の福祉サービスや福祉制度がなければ、新しいサービス・制度をボランティアや民生委員、あるいは地域の人々の力を借りて開発すること④生活問題を抱えている人や家族を支援していくためには、行政や専門職だけでは支えられず、地域住民の協力・参加が必要になるので、住民の社会福祉に対する見方・考え方を改善する努力もしつつ、具体的に問題を抱える人や家族への支援のネットワークを作り、支援することの4つの機能や実施した全国に誇れる実践である。

コミュニティソーシャルワークという考え方を具現化した「こみっと」という素晴らしい実践が高く評価できる点は、第1は、“引きこもり”という今日の日本で大きな問題であり、且つ実態を把握することが困難であり、接近が難しい問題について行われ、人口4千人の町で100人という実態を明らかにしたことである。日本の社会福祉は、従来措置行政や申請主義ということもあって、行政はややもすると“待ち”の姿勢になりがちが、藤里町社会福祉協議会はアウトリーチ型ニーズ把握と言われる訪問による徹底したニーズの掘り起こしと把握をした。“同級生ネットワークや元ＰＴＡネットワーク”という地域の社会資源を活用しながら芋づる式に実態把握をした点、厚生労働省の“引きこもり”という考え方、定義によらず、本人や家族の気持ちを大事にしつつ、社会的につながりが十分もてず、生活に困っていることという住民目線を大事にして、ソーシャルワークという専門職の立場から住民に説明し、地域に、家族に切り込んでいく視点と手法は素晴らしいものである。

第2には、これらの調査を社会福祉協議会の専門職である社会福祉士や精神保健福祉士が担っているが、単に国家資格を有しているということだけでなく、ソーシャルワークの視点・機能を十分発揮していることである。初回の訪問で家族との信頼や“引きこもっている人”との

釜石市議会事務局
27.4.16
No. 47
受付

信頼関係が築けなければ、かえって問題をこじらせてしまい、解決を困難にさせることを踏まえていること、社会的偏見・差別がまだある地域での住民感情をよく踏まえて対応していること、家族の感情表出を考えていること、その上で専門職が陥りやすい「支援してあげているつもり」などの視点・内容も素晴らしいものである。

第３には、財政等大変厳しい藤里町にあって、社会福祉協議会が積極的に国の制度や財団などの助成制度を活用し、新しい実践分野を切り開いていることである。地域包括支援センター、指定相談支援事業所、地域活動支援センターなど住民の相談・支援を展開するソーシャルワーカー“ヒトもカネもモノも効率化し、町民にとって使い勝手が良い”サービスを提供することを考え、縦割り福祉ではなく、トータルケアを考えて実践していることである。

第４は、家庭訪問で明らかになった“引きこもり”の人々の単なる実態調査に終わることなく、その人々を外に連れ出すプログラムや新しい資源としての働く場、居場所、宿泊棟を造ったことである。ソーシャルワークには既存の利用できるサービスがなければ新しいサービスを開発する機能もあるが、まさに「こみっと」という家族以外の社会的な居場所、働く場、交流の場を提供したことは、素晴らしいソーシャルワーク実践である。

ここをぜひ訪れてみたいと思ったのは、ＮＨＫ「クローズアップ現代」で放送されていたのを観たからである。藤里町社協の菊池事務局長の地域のネットワークを活用して“引きこもり”の実態把握をしている様子がとても鮮烈であった。それは、本人や家族の気持ちを大事にしながらの方法であり、レクリエーションなどの呼びかけでは出てこない人たちが、仕事に関係する講習会には反応を示し、出てきたのである。そして、「こみっと」という居場所をつくったわけだが、このいわれは“こじんまりと関わりをもつ”ということであり、それは自分たちの居場所であると同時に社会との交流の場であり、他者に役立つことを実践する場所でもある。ここに職業訓練の指導に来てくれる地域の人々も非常に良い。居酒屋、葬儀屋、工務店等の店主が来て、興味深くしゃべっていってくれる。地域住民との交流の場が増えるほどに、理解者、支援者が増えていく。そして、「こみっと」登録者が、これらの社会復帰訓練カリキュラムを受講しながら、地域活性化へ貢献するようになっていくのである。このような「こみっと」の実践を通して、藤里町全体が「福祉でまちづくり」を行っていく素晴らしい取り組みであった。

藤里町
社会福祉協議会
菊池まゆみ
上席事務局長と共に

（宿泊先）
町営
ホテルゆとりあ藤里

写真左から3番目の
支配人（白土さん）
が釜石出身でした。